開かれたホームをめざして

人間だれしも好ましい環境のもと、心身共にいつまでも健やかに生きたいと思っています。そして最後は長煩いせず周りの人にもあまり面倒をかけず天寿を全うしたいと願っています。

益城町にある特別養護老人ホーム「ひろやす荘」には、定員いっぱいの百四十人が入所されています。この種のホームは県下二十八か所どこも一ぱいで空くのを待っている人もおられるようです。

益城町は最近、熊本市のベッドタウン的な発展を続けており、「ひろやす荘」の回りにも新しい住宅が建ち並んでいます。

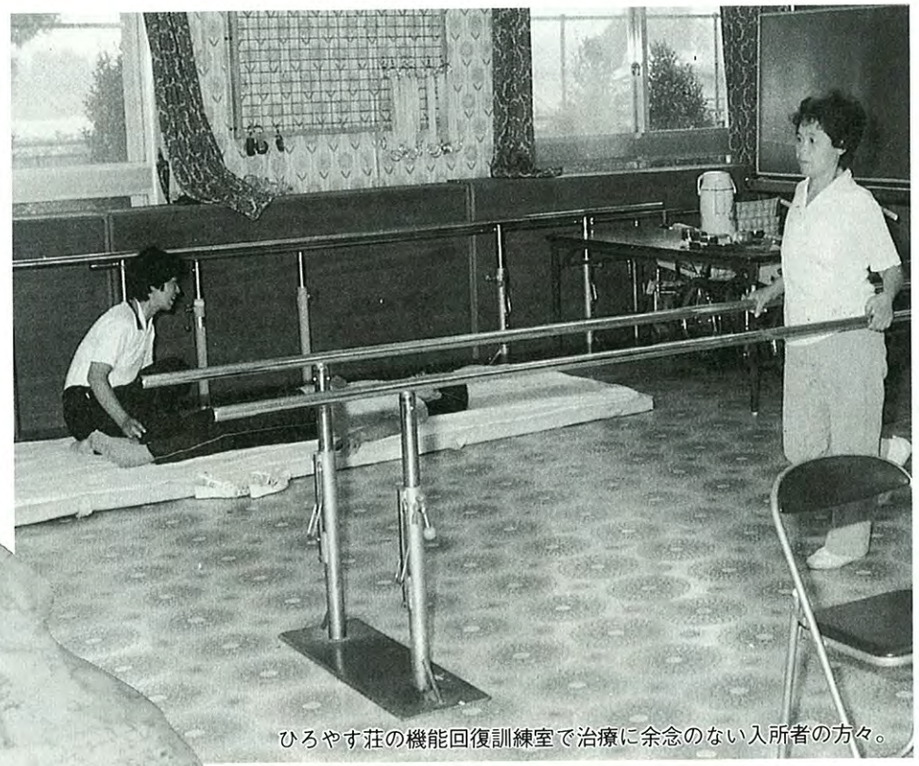
そうした立地の条件ともあいまって、ここでは入所者と地域との交流を求めて開かれたホーム運営に力を入れておられます。

週二回全員の入浴、おむつをはずすための本人への働きかけ、個々の症状にあった十数種の食事作りなど、職員の方の努力により入所者への手厚い介護がなされています。また寝たきりでも手が自由な人はモール人形を作り、交通安全運動の一助として町内の幼稚園・小学校・道行くドライバーへ贈るなどの社会参加をしたり、趣味のクラブや作業を地元の人と一緒にやるなど、施設の中にあっても積極的に生きる喜びを感じられるよう十分な配慮がなされています。

一方在宅寝たきり老人の入浴サービス、在宅者の機能回復訓練（熊本市内はマイクロバスで送迎）、短期入所などが実施されています。

家庭で寝たきり老人の介護にあたる人が疲労や病気・冠婚葬祭への出席などで一時的に面倒が見れない場合に、ホームで預かってもらう短期入所は他の特別養護老人ホームでも実施されています。しかし、その利用はまだ数が少なく、入所費用を国と県が半額ずつ負担する事になっていますが、予算にはまだ余裕があるとのことでした。

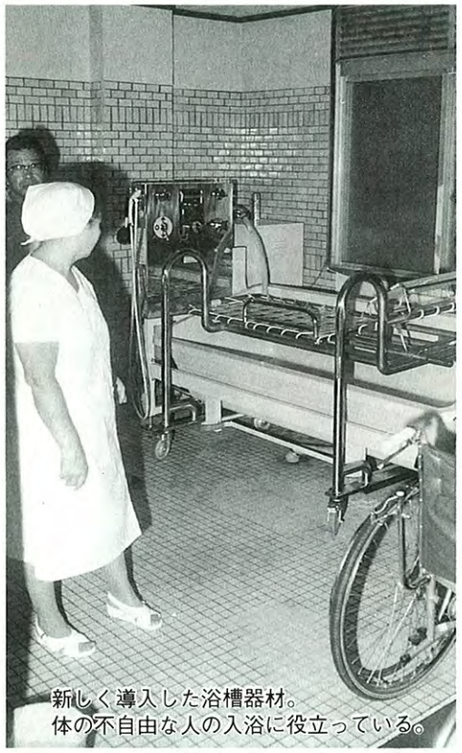
家庭介護者の労力を少しでも軽くするため、このシステムがもっと多くの人々に気軽に活用されればと思います。また、行政担当者の温かい助言や入所手続きの説明など、きめのこまかな対応が望まれます。


ひろやす荘の機能回復訓練室で治療に余念のない入所者の方々。

自分の問題として考える

真近にせまっている高齢化社会には、年金・医療・福祉・高齢者雇用促進などさまざまな難問が山積しています。そして核家族化・高学歴化・社会意識の変化と多様化は、更に老人問題を複雑で困難なものにしています。

それだけにこれは家族の努力だけでは解決出来ない多面的な要素を抱えていると言えるでしょう。この状況を今の老人の問題としてだけでなく、自分や子どもの現在や将来の問題としてとらえ、考えて行く必要があると思います。


新しく導入した浴槽器材。
体の不自由な人の入浴に役立っている。

ドライバーにモール人形を配り、
交通安全を呼びかける。

入所しているおばあちゃんと談笑する落合さん

益城町にあるひろやす荘。24時間テレビの募金による入浴車も配置されている。